

# 苦小牧東病院の今

緩和ケア病棟開設4年 上

緩和ケアとは、がん治療に伴う痛み、吐き気、倦怠(けんたい)感など副作用や、がんが引き起こす体の痛みを和らげる治療法の一つ。闘病中の患者と家族の不安な

## 希望かなえるケアを

がん患者が最期まで自分らしく生活できるように、手厚くサポートしようと、苦小牧東病院(橋本洋一理事長)は「緩和ケア病棟(15床)を開設してから4年目を迎えた。これまで300人以上の患者を受け入れ、家族を含めて「希望をかなえるケア」を提供。東胆振、日高エリア唯一の緩和ケア病棟として実績を重ねる同病院の取り組みを紹介する。

の談話室にキッチンを設け、家族が料理して一緒に食事できるスペースも確保する。「ベッドを連れてきてもいいし、昼食と夕食の内容は好きなものを選べる。好物を持ち込んで自由に食べてほしい。医師と相談の上、夜にアルコール

心を支える役割も果たし、がんを診断された段階からの導入が進みつつある。入院して手厚い緩和ケアを受けられる緩和ケア病棟としては、国の基準を満たした道内21病院・472床が指定(2017年12月現在)されている。14年10月に開設した苦小牧東病

院は医師、看護師、薬剤師、作業療法士、臨床心理士、管理栄養士、社会福祉士らでチーム医療を展開。副作用が生じる治療を中止し、苦痛からの解放を図る。麻酔科医の浅野真緩和医療統括部長は、がんによる痛みの程度と痛みの元を専門家の目で突き止めた上で、鎮痛薬や神経ブロックなど適切な治療を選び、効果的に痛みを和らげるのを得意とする。これら症状コントロールに加え、穏やかに最期を迎えられる看取りにも対応。自宅で療養生活を希望する場合は、在宅医療を担う医師や訪問看護師、ケアマネジャーら地域の関係者との連携で調整している。同病院では、15床すべてが個室で、車いす対応トイレ、洗面所、ベッド、テレビを完備。家族は24時間付き添いでき、共用

## がん患者300人以上受け入れ



東胆振、日高唯一の緩和ケア病棟を有する苦小牧東病院

を飲んで構わない」(大谷直美緩和ケア認定看護師)。

患者の半数以上が苦小牧市内の総合病院からの紹介。17年9月末までの入院患者数は延べ325人になる。年齢は70、80代が多く、平均在院日数は42日、長くと200日を超える事例もある。病棟の入院患者15人に対し看護師は平日昼間5、6人、休日昼間4人、夜中は2人を配置し、一般的な病棟よりかなり多いため、患者一人一人に気を配りやすい体制となっている。不安を訴える家族も交えて1、2時間話し込むことも珍しくない。突然、「自宅の様子が気になるので帰りたい」と言えば、すぐに看護師が付き添って一時帰宅に対応するなど、濃厚なケアに取り組んでいる。

佐藤早苗部長は「患者さんの希望をかなえ、後悔のない人生を後押ししたい」と願う。自宅のような雰囲気でも伸び伸び生活してもらおうと、音楽療法やセラピーユニット・ケアといった患者を癒やす活動に取り組むボランティアも積極的に迎え入れている。佐藤部長は「外部のさまざまな人と交流すると生活に潤いが生まれる。地域に開かれた明るい病棟にした」と話す。

(伊藤真史)

# 苦小牧東病院の今

緩和ケア病棟開設4年 下

歩一歩、ゆっくり前に進んだ。中学校の英語教師を定年退職後、塾を運営してきた光子さんは、1年ほど前に体調を崩し病院を受診したところ、末期(ステージ4)の胃がんであることが判明した。突然のがん宣告に本人も家族も動揺を隠せず、札幌と苦小牧の病院で抗がん剤治療を懸命に続けた

## 暗いイメージ変えたい



孫やスタッフに見守られ、穏やかに過ごす光子さん(左)

「緩和ケアに対する住民の認知度はまだまだ低い。緩和ケア病棟と聞くと、暗いイメージを持つ人も少なくないが、そうした誤解を解いていきたい」と小川雅子医療相談室長。病院独自に市民講演会を開催するなどし、啓発活動にも力を入れていく考えだ。

(伊藤真史)

「わあ、母が歩けるようになった」。39歳の長女はばあっと笑顔になり、思わずスマートフォンで撮影を始めていた。昨年12月下旬の屋下がり、苦小牧東病院緩和ケア病棟の談話室で、車いす生活だった苦小牧市在住の長谷川光子さん(75)が、看護師と作業療法士に支えられながら歩行器を使って一

## 穏やかに安心して暮らせる場

が、体の衰えは進み、寝たきり状態になった。「残された時間を専門家に支えてもらいながら楽しく過ごしてほしい」という長女らの気持ちに添って昨年12月中旬、入院生活に入った。

抗がん剤治療をやめた結果、副作用による吐き気や食欲不振はなくなった。3カ月にわたって鼻にチューブを入れて栄養を取っていたが、入院から数日で口から食べられるまで回復。「食事がおいしくてね。好きなものをリクエストできるの。そうめん、そば、きょうの昼食はチャーハンだったわ。光子さんは声を弾ませながら言葉を続ける。「周囲のスタッフがね、私の気持ちを察して話し掛けてくれるの。『水を飲みたい?』『トイレ大丈夫?』って。話し相手になってくれるし、ナースコールを押すと4人も5人も駆け付けてくれる、それだけで安心する」。談話室で孫の颯(はやと)くん(5)に見守られ、特技の編み物をスツップの若い臨床心理士に教えながら、光子さんは穏やかな表情を浮かべた。

病院に泊まり込んで共に時間を過ごす長女は「がんという病気に過ごす家族は無縁だと思っていた。体調を崩して苦しむ母に何もしてあげられず、自宅で面倒を見るのは限界がある。ここで医師や看護師さんらに体調管理してもらい、スタッフとおしゃべりする母が安心して暮らせる場として、

は楽しそう」と目を潤ませた。

◇ ◇

緩和ケアに詳しいプロが支えるから、皆さん安心して生き生きと生活できる」と秋山悦子看護部長。がんという病が引き起こす副作用、痛み、不安を和らげ、穏やかに暮らせる場として、

東胆振と日高唯一の緩和ケア病棟が根付きつつある。

過去にこんな事例があった。札幌在住の60代夫婦の夫ががんになり「海の見える街で過ごしたい」と苦小牧に移住。その後、容体急変でかかりつけの札幌の病院に入院した。「最期はやはり苦小牧」と苦小牧東病院に1週間入院している間、同病院が在宅医や訪問看護師らと連携し、自宅で療養できるように調整。思いの詰まった自宅で最期の2週間を過ごせた。

この3年間で、地域の医療介護関係者と連携できる体制づくりが進んだが、秋山看護部長は「緩和ケア病棟と自宅のどちらでも手厚く支援を受けられるようにするには他の医療機関やケアマネジャーなどと患者さんの情報共有の強化が欠かせない」と指摘。患者情報を盛り込んだ地域連携パスのさらなる活用などを模索する。